

授業実践力育成のための理論と実践

国語教育講座・氏名 三浦和尚

1. 授業の概要

この授業の目的は、国語科授業実践の構想過程を理解するとともに、授業実践力について理解を深め、授業実践の基礎的能力を育成することである。また、到達目標は、国語科授業構想の手順を理解し、学習指導案を作成するとともに、実際の授業展開能力の基礎を身につけることができたかという点にある。つまり、国語科授業の構想と展開について、実務的な知見や技術を身につけるとともに、その背景にある理論について理解していくということである。

この授業の位置づけとしては、国語科教育法Ⅰにおいて国語科教育の概論があり、国語科教育法Ⅱにおいて特に文学的文章の教材研究が行われたことを受けて、実務的な授業実践能力を養うことになっている。

その授業内容は、おおよそ次のとおりである。

① ガイダンス

これまでの国語科教育法の内容を振り返るとともに、自身の国語科学習个体史を確認し、「よい国語科授業」とは何かについて考察する。

② 学習者研究論

授業力(構想力・展開力・評価力)の「構想力」にあたる国語科学習材研究(学習者の把握・学習材の分析・指導法の工夫)の理念とそのあり方について考察する。

③ 授業構想と模擬授業

授業の構想の内容と指導案の実際について理解した後、中学・高校の学習材『少年の日の思い出』(中学1年)『ミロのビーナス』(高校2年)『高名の木登り』(中学3年)『まず隗より始めよ』(高校1年)について、具体的に指導案を作成する。指導案は赤を入れて返す。さらに、それを相互評価した後、グループで指導案を作成しなおし、それに基づいて模擬授業を行う。

④ 国語科学習指導のあり方

それぞれの模擬授業について、協議した後、

古典学習指導のあり方、文学の学習指導のあり方、説明的文章の学習指導のあり方について考察する。

⑤ 授業実地観察

7月14日(火)、松山商業高校 山田暢子教諭による授業「不若人有其宝」(3年生 漢文)を実地観察した。授業観察の振り返りとして、次のような観点から分析した。

- ・ 複数の子どもたちがいる意味
- ・ 「41人目の学習者」としての教師
- ・ 学力・目標の明確化
- ・ 目標以外にも学ぶ——学力観と能力観(安彦忠彦の能力イメージ)
- ・ 「実の場」の形成と単元学習
- ・ 「読むこと」における「実の場」——価値目標と技能目標
- ・ 「読む力」の育成としての課題解決(発問)体験

⑥ 表現の学習指導のあり方

「話す・聞く」「書く」の領域の学習指導について、中学・高校における内容と方法を考察する。

⑦ まとめ

全体の学習を振り返る。

この授業を通して、国語科教材研究の成果をどのように学習指導に活かすのか、指導の展開はどうあるべきか、指導案に必要な要素はどのようなものかといった点について理解を深めると同時に、それを通して、国語学力とは何かといった点の考察を進めることができたと考えている。

2. 授業評価の方法

面談法と記述を中心としたアンケート法による。全受講者数は42名である。

3. 結果の概略と感想

学習指導の構想の筋道(教材分析、学習者分析、指導法の工夫)を確認した後、指導案を実際に作る、それをグループで練りあって模擬授業を行うという過程は、結果的に教育実習に近い形になっており、実務的な授業といえる。その後、授業の競

技をして、教員の方からその評価をする。また、そういった領域の指導のあり方を講義するという形になっている。

以前は、講義をしてから模擬授業に入ったが、実際に授業を自分たちでやってみたほうが、その反省も含め、実感的に捉えられ、効果的であると感じている。

実地観察はこれで3年目であるが、幸運にも、珍しく、高校で授業を提供してくださる方がいるので、助かっている。今回も、実際の高校生を前に、教室で展開される授業を見ることはきわめて有意義であった。学生の評価も高く、今後も継続していく予定である。

以下に、いくつかの学生の評価を挙げる。

A この授業では、実際に指導案を作ったり授業をしたりする中で、具体的な国語科の授業のあり方というものを、体験を通じて学ぶことが出来た。また、古文、漢文、文学的文章、説明的文章の四つについて、それぞれの特徴や学ぶ意義、授業の進め方、身につけさせたい力について考えることが出来た。

学んだことの中でも、特に印象に残っていることや、今後の授業作りにおいて大切にしたいと思ったことは、以下の三つである。

- ① どういった単元の授業においても、生徒の話す、聞く、書く、読むといった活動をさまざまに織り込みながら、生徒の主体的な学習を保障していくこと。
- ② 生徒自身が考え、友達と意見交換をしながら学びあい、そこから発展していけるような授業作りをすること。
- ③ それぞれの作品が持つ特有の面白さを知り、それを踏まえながら生徒に身につけさせたい力をしっかりと持つこと。

B この授業で最も感じたことは、国語の授業の難しさである。それぞれの作品から子どもたちに何を学ばせるのか、何を得てほしいのか、技能目標・価値目標の両方の点から考え、明確なものとして提示することが考えていた以上に難しく、先生のお話や他の学生の意見・模擬授業がとても参考になった。模擬授業では、それぞれよい点、改善点があり、自分ならどのような授業が出来るのだろうか、と考えながら受けることが出来た。どの授業もそれぞれ学ぶところや参考にすべきところがあり、まだ実践経験がない私にとって、いろいろな意味で刺激になった。また、古典・文学的文章・説明的文章の学習のそれぞれの意義や指導の仕方も学ぶことが出来、今まであいまいになっていたところが自分の中で少しずつ明確にな

ってきたと思う。特に発問についてはとても勉強になった。質問と発問の違い、そもそも発問とはどういうものなのか、どのような発問が効果的なのかなど、多くのことを学ぶことが出来た。

そして、松山商業の授業では、実際の授業を体験することによって得たこと、知ったことがたくさんあった。ひとつは朗読の大切さである。また、いかに生徒に古典に興味を持たせるかという教師の工夫、発問、板書の仕方などととても参考になった。しかし、私が一番印象に残ったのは、そのクラスの特色にあわせて授業をしていこうとしている先生の姿勢である。一人ひとりに個性があるように、クラスにもそれぞれ特色がある。すべてのクラスに同じ授業をするのではなく、可能な限りそのクラスにあわせて授業をするという姿勢が、教師にとって負担は大きくなるが、とても理想的だなと感じた。

今回の授業で学んだことは、来年の教育実習でも大いに役立つと思うので、自分なりに整理しながらしっかりと習得しておきたいと思う。

4. 今後の課題

テキストを使わない授業だったので、どれだけ学習を定着できているかは不安なところがないわけではないが、学生の記述に表れているように、実践的知見についてはある程度満足させえたのではないかと感じている。以下のような記述は、授業者の意図するところを受けてくれている。

「具体的な国語科の授業のあり方というものを、体験を通じて学ぶことが出来た」

「古典・文学的文章・説明的文章の学習のそれぞれの意義や指導の仕方も学ぶことが出来、今まであいまいになっていたところが自分の中で少しずつ明確になってきた」

また、「生徒の主体的学習」「作品が持つ特有の面白さ」「クラスの特色にあわせた授業」などの授業に向かう姿勢や、「目標」「朗読」「発問と質問」など、具体的な指導技術についても触れられている。それらは、実際の高校での授業観察によるところが大きいであろう。

仔細に反省すれば、模擬授業のあとの協議が学生主体になりきっていない、模擬授業の教材そのものが適切か、などの反省点はある。

但し、私自身は、学生の反応を見ながら授業内容を変えろという、授業本来の姿に近い方法をとったつもりである。それゆえに、多少ギクシャクしたところもないではないが、学生の反応を無視してシラバスにしがみつような授業だけは避けたいと思う。